

いじめ経験時の周囲の関わりといじめ経験の長期的影響との 関連性の検討

The Relationship between Social Support the Time of a Bullying Experience and the Long-Term Effects of the Bullying Experience

齊 藤 英 俊

要旨

本研究では、いじめ被害経験者にとって、いじめ被害経験時の周囲の人たちの関わりのうち役立ったと感じている関わりの内容を検討することを目的とした。青年期の過去にいじめ被害経験をもつ人を対象に、いじめ被害経験時に周囲の人の役立ったと思っている関わりの内容を自由記述で回答してもらった。その結果、役立った関わりは「相談に乗る」、「いじめへの介入」、「精神的な支え」といった共通点があった。一方、先生、友人、親のそれぞれによって役立った関わりの内容には違いも見られた。

キーワード：いじめ(bullying)／長期的影響(long-term effect)／周囲の関わり(social support)

問題

「いじめ」の問題は、教育場面における課題でもあるが、近年、いじめ被害経験と PTSD との関連が指摘されており(細澤, 2004)、いじめの経験の影響はいじめを経験しただけでなく、それを受けた長期間後にも精神的・身体的な影響を及ぼすことが明らかにされてきており(立花, 1990; 坂西, 1995; 香取, 1999; 森本, 2004; 三島, 2008; Sourander et al., 2000)、いじめを経験することは、いじめ経験時だけでなく、いじめ経験後においても重要なテーマと思われる。

いじめ経験の長期的影響

いじめ経験の長期的影響にはどのようなものがあるのだろうか。香取(1999)によれば、いじめの長期的影響には、情緒的不適応、同調傾向、他者評価への敏感というマイナスの影響、他者尊重、精神的強さ、進路選択への影響というプラスの影響があり、大学生を対象にした調査の結果では、被害経験者はどちらも高く、傍観者は同調傾向が

高まることが明らかにされている。このように、いじめ経験の長期的影響としてプラスの側面とマイナスの側面があり、心理的な影響を与えていることが示されている。

いじめ経験の長期的影響とソーシャルサポートとの関連

いじめ経験といじめ経験時のソーシャルサポートには関連性があることがわかってきている。

ソーシャルサポートとは「家族や友人など、ある個人を取り巻くさまざまな人々から与えられる有形・無形の支援」(嶋, 1991)のことをいう。

ソーシャルサポートがいじめ被害の苦痛を和らげたり(Malecki et al., 2008)、いじめ被害者の身体的症状を少なくする効果があることが指摘されている(Gini et al., 2009)。中学生を対象にした調査では、いじめ被害経験者は、いじめ被害経験がない人よりもソーシャルサポートが低いことが示されている(菱田ら, 2011)。登校拒否感情や攻撃性との関連では、森下(1999)の小中学生を対象にした研究によると、小学生ではいじめストレスが高い女子において情緒的サポートが登校拒否感情を緩和することがみられ、中学生では、

SAITO, Hidetoshi

北陸学院大学 人間総合学部 幼児児童教育学科
発達心理学、教育心理学

いじめストレスが高くサポートの少ない女子は攻撃性や登校拒否感情が高い傾向があり、サポートの高い者は攻撃性が低いことが明らかにされている。

また、サポート源による違いも明らかにされており、ラテン系アメリカ人の子どもを対象にした調査では、教師からのサポートは学校不適応感を軽減させ、仲のよい友だちからのサポートは個人的な適応(親や他の人とのよい関係、自尊心など)を高めることが明らかにされている(Malecki et al., 2008)。12才から16才を対象にした調査では被害者において教師、クラスメイト、親からのソーシャルサポートがあると、不安や抑うつといった精神的不健康が低いことが示されている(Rigby, 2000)。また、適度な仲間のソーシャルサポートがある被害者は不安や抑うつ感が低いことが報告されている(Holt et al., 2007)。このように、いじめ経験時とそのときのソーシャルサポートには様々な要因で関連があることが示されている。

ただ、いじめ経験とソーシャルサポートとの関連に関する調査の多くは、小中高校生の年代を対象にしたものであり、いじめ経験の長期的影響にソーシャルサポートがどう関連しているかはほとんど明らかにされていない。Masaki (2011)は、大学生を対象に過去のいじめ被害経験とソーシャルサポート、認知的再評価が現在の精神的健康にどう関連しているか調査をしている。その結果によると、当時の情緒的サポートが、いじめ被害経験の認知的再評価につながり、認知的再評価が精神的健康の高さに関連していることが明らかにされている。この研究から、いじめ被害経験の長期的影響と、ソーシャルサポートは関連していると考えられる。しかし、Masaki (2011)においては、友だちのソーシャルサポートに限定されている。だが、友だち以外の親や教師といった人のサポートといじめ経験の長期的影響との関連も考えられる。

それらを明らかにすることは、いじめ被害経験者にとって周囲の人のどのような関わりが有効な関わりやサポートなのかを明らかにすることにつながると思われる。

そこで、いじめ被害経験者の長期的影響、特に

プラスの影響に、周囲の人のどのような関わりが関連しているかを検討し、いじめ被害経験者のプラスの影響を促進させ、マイナスの影響を軽減されるような周囲の関わりやサポートのあり方について考察する。

方法

調査参加者と調査方法

過去にいじめ被害経験をもつ18~24歳の300名(男性104名:女性194名,平均年齢:21.66歳)を対象に、2012年1月に学術的な調査を行っているリサーチ会社に委託し、インターネットによるネット調査を実施した。

質問紙の構成

いじめ被害経験の時期 小学校1年~高校3年までの間で1つ選んでもらった。複数ある場合は、一番辛かった経験について回答を求めた。

いじめ被害経験の長期的影響 松下(2005)の過去のネガティブな経験への現在の意味づけの結果を参考に「1.今でも辛い苦しいものと考えている。」(マイナスの影響と想定)、「2.自分を成長させてくれたものと考えている。」(プラスの影響と想定)の2項目のどちらかを選択し回答を求めた。

いじめ経験時のソーシャルサポート¹ 「自分を成長させてくれたものと考えている」と回答した者に、いじめ経験が「自分の成長」に結びつく上で、当時あるいはその後に出会った「先生」・「親しい友人」・「父親」・「母親」のそれぞれの人の関わりが役立ったかを尋ねた。それぞれ「役立った」・「役立たなかった」の2つから1つ選んでもらい、どのような関わりが役立ったかを回答を求めた。

分析方法

得られたデータをもとに、KJ法を参考に、自由記述の内容を分類した。複数の内容が含まれているものは、それぞれ分類し、内容が分からないものに関しては除外した。

結果

いじめ被害経験の時期

いじめにあった時期は、小学校高学年から中学校2年生にかけて多かった。

いじめ被害経験の長期的影響

マイナスの影響を感じている人よりもプラスの影響のほうを強く感じている人の方が多い結果となった（表1）。

表1 いじめ被害経験の長期的影響の結果

1	今でも辛い苦しいものと考えている。	133
2	自分を成長させてくれたものと考えている。	167

自分の成長に結びつく関わりに関する結果

それぞれの人（サポート源）のどのような関わりが自分の成長に結びついたと感じているかを検討していく。

1) 先生

先生との関わりにおいては、役立ったと感じている人は約3割であった（表2）。

表2 先生との関わりが役立ったかどうかの結果

1	役立った	48
2	役立たなかった	119

先生の役立った関わりの内容

先生の役に立った関わりにおいては、大きく「いじめへの態度」、「本人への態度」、「先生自身の態度」の3つのカテゴリーに分かれた（表3）。

「いじめへの態度」は、先生がいじめに対してどのような態度を取ったかを示す内容に関するものである。この中の「いじめを解決」は、いじめを解決してくれたといった先生の直接的ないじめの解決に関する内容、「いじめの出来事を話す機会の提供」は、いじめのことを話す機会を先生がつくってくれ、いじめのことを取りあげてくれたという内容、「きちんとした対応」は、いじめ加害者を注意するといった先生としていじめに対して積極的に対応した関わりの内容が含まれた。

「本人への態度」は、先生からいじめを受けた本人に対しての態度に関するものである。この中の「言葉かけ」は、先生からの本人に対する有益な言葉かけの内容であり、いじめに関するアドバイスをくれたといった「アドバイス」や本人の大変さを労う「労い」といった内容が含まれ、「相談にのる」は、いじめの相談に乗ってくれたという内容、「支えになる」は、先生自身が本人にとって支え先生自身が本人にとって精神的な支えの

表3 先生との役立った関わりの結果

大カテゴリー	小カテゴリー		例
いじめへの態度	いじめを解決		解決に導いてくれた。
	いじめの出来事を話す機会の提供		いじめていた子と話し合いをさせた、学級会で先生が議題を出した。
	きちんとした対応		いじている人に注意、状況を改善しようとフォローやケアをした
本人への態度	言葉かけ	アドバイス	的確なアドバイスをくれた、忠告してくれた。
		労い	「よく乗り越えたな」と言ってくれた。
	相談にのる		相談に乗ってくれた、話を聞いてくれた。
	支えになる		守ってくれた、いつもそばにいてくれた。
先生自身の態度	姿勢や考え方		先生の前向きな考えや姿勢、視野の広い考え方を教えてくれた。
	普段の態度		みんな平等だった。

存在になったという内容が含まれた。

「先生自身の態度」は、先生自身の普段の考え方、態度といった内容に関するものである。この中の「姿勢や考え方」は、先生の普段の物事に対する姿勢や考え方に関する内容が、「普段の態度」は、先生の学校生活での普段の態度の内容が含まれた。

2) 親しい友人

親しい友人との関わりにおいては、やや役立たなかった数の方が多いが、半数近くの方が役立ったと回答した(表4)。

表4 親しい友人との関わりが役立ったかどうかの結果

1	役立った	81
2	役立たなかった	86

親しい友人の役立った関わりの内容

役立った関わりは以下のように分類された(表5)。

友人の役立った関わりは、大きく「いじめへの態度」と「友人の存在」に分けられた。

「いじめへの態度」は、いじめに対する親しい友人の態度に関する内容である。このカテゴリーの「助ける」は、いじめから助けてくれたといった内容、「アドバイス」は、いじめ解決に向けてアドバイスを教えてくれたという内容が含まれた。

「友人の存在」は、親しい友人の存在が本人にとって役立ったと感じた内容に関するものである。

この中の「味方」はいじめを受けていた時や普段の場面で本人の味方になってくれた、「変わらない関わり」は、いじめを受けていた時もそれまでと変わらず接してくれたという内容、「相談」は、いじめの相談にのってくれたといった内容、「存在の大きさ」は、友人という存在そのものが精神的な支えとなるといった内容が含まれた。

3) 父親

父親との関わりにおいては、役立たなかったが約8割を占めていた。(表6)。

表6 父親との関わりが役立ったかどうかの結果

1	役立った	35
2	役立たなかった	132

父親の役立った関わりの内容

役立った関わりは、以下のように分類できた(表7)。

父親の役立った関わりでは、大きく「支えてくれる存在」と「いじめへの対応」の2つの側面とその他の内容であった。

「支えてくれる存在」は、頼りになる、安心するといった父親の存在が自分にとって支えになるという内容である。この中の「頼りになる」は、父親として力になってくれたり、冷静に判断してくれるといった父親として頼りになるという内容、「安心する」は、父親の存在が安心感につながるという内容、「相談相手」は、相談にのってくれ

表5 親しい友人との役立った関わりの内容の結果

大カテゴリー	小カテゴリー	例
いじめへの態度	助ける	かばって助けてくれた。
	アドバイス	解決法を教えてくれた。
友人の存在	味方	味方になってくれた。力になってくれた。
	変わらない関わり	つらい時もそばに居てくれて、いつ通り接してくれた。家に普通に遊びに来てくれた。
	相談	相談に乗ってくれた。
	存在の大きさ	親友がいたから辛くても頑張れた。心の支えとなった。

表7 父親との役立った関わりの結果

大カテゴリー	小カテゴリー	例
支えてくれる存在	頼りになる	力になってくれた。現実的な問題を冷静に判断してくれるので助かる。
	安心する	傍らにいてくれるだけで安心する。
	相談相手	相談にのってくれた、解決の方法を一緒に考えてくれた
	認めてくれる	いつも私を認め、包み込んでくれていた。お前は悪くないといい続けてくれた。
いじめへの対応	直接的な介入	仲介役になってくれた。向こうの家に殴り込みに行った。
	本人を尊重した対応	学校に行かなくてよいと伝えてくれた。殴っても責任は取ると言ってくれた。
その他		一緒に遊んでくれた。

たといった内容、「認めてくれる」は、自分の存在を認めてくれるような関わりの内容が含まれた。

「いじめへの対応」は、父親のいじめに対する対応の内容である。この中の「直接的な介入」は、仲介役になってくれたといったいじめに直接関わった内容、「本人を尊重した対応」は、学校に行かなくてもいいといった本人を尊重する対応の内容が含まれた。

以上の2つに含まれないものとして、一緒に遊んでくれたといった普段の対応に関する内容もあった。

4) 母親

母親とのかかわりにおいては、約45%が役立ったと答えており、これは友人に次ぐ数字であり、母親の関わりが効果的に役立っていることを示している（表8）。

表8 母親との関わりが役立ったかどうかの結果

1	役立った	74
2	役立たなかった	93

母親の役立った関わりの内容

母親の役立った関わりの内容は、大きく「相談」、「いじめへの対応」、「言葉かけ」、「母親の存在」の

4つの側面に分けられた（表9）。

「相談」は、母親がいじめの相談を受けた時の関わりに関する内容である。この中の「相談に乗る」は、母親がいじめの相談に乗ってくれたという内容であり、「アドバイス」は、いじめへの対処として何かしらのアドバイスをくれたという内容である。

「いじめへの対応」は、母親がいじめに対してどのような対応をしたかに関する内容である。この中の、「直接的な対応」は、先生やいじめっ子に話しに行くといった直接的な対応の内容であり、「間接的な対応」は、同じ境遇の子とふれ合う機会をつくったり、無理しなくてもいいといったり本人の立場に立って役立つような対応の内容が含まれた。

「言葉かけ」は、母親が本人に対しての言葉かけに関する内容である。「励まし」は、本人を励ます内容、「味方」は、どんなときでも本人の味方であるといった言葉かけの内容、「気遣い」は、普段の何気ない母親の本人を気遣う言葉かけの内容が含まれた。

「母親の存在」は、母親の存在そのものに関する内容である。この中の、「精神的支え」は、母親の存在そのものが精神的な支えであるという内容であり、「関係の良好さ」は、母親と本人との

表9 母親との役立った関わりの結果

大カテゴリー	小カテゴリー	例
相談	相談に乗る	相談に乗ってくれた。話を聞いてくれた。
	アドバイス	アドバイスをくれた。
いじめへの対応	直接的な対応	先生にかけあってくれた。いじめっ子に文句を言いに行った。
	間接的な対応	同じ境遇の生徒との交流に登校させてもらった。
言葉かけ	励まし	励ましてくれた。
	味方	味方になってくれた。親身になってくれた。
	気遣い	いつも優しい言葉をかけてくれた。
母親の存在	精神的支え	存在が心の支えだった。
	関係の良好さ	いつもやさしかった。なんでも話せる関係。
	安心できる	家庭にいると安心できた。

よい関係が築かれていることに関する内容、「安心できる」は母親の存在や関わりが本人にとって安心感を与えてくれるといった内容が含まれた。

考察

関わる人（サポート源）による役立った関わりの違いの検討

本研究の結果より、自分の成長に役立った、プラスの影響のほうを感じている人にとって、役立った関わりをしていた人の割合が高かったのは、親しい友人が1番で、その次が母親であった。仲のよい友だちからのサポートは個人的な適応（親や他の人とのよい関係、自尊心など）を高めることが明らかにされており（Malecki et al., 2008）、いじめ被害経験の長期的影響においても同年代のサポートは大きな役割を果たしている可能性がある。母親のサポートが2番目に来た理由として、今回の調査対象者が女性の割合のほうが高いことが関係していると思われる。2つに、母親の関わりは、存在自体の支えから介入、言葉かけなど多岐に渡っていることが関係していることが考えられる。

サポート源別の関わりの内容の検討

それぞれの人の関わりの内容を検討する。先生の場合では、役立った関わりにおいては、「いじめへの態度」の内容は、いじめに対しての直接的な関わりの内容と思われる。どれもいじめを解決する関わりや状況の改善に向けての行為であり、先生の積極的な関わりが役立ったと考えられる。「本人への態度」の内容は、被害者への先生の寄り添う関わりが反映されていると思われる。このような先生の親身になって寄り添う態度が役立ったことにつながったと考えられる。「先生自身の態度」の内容は、先生の普段の姿勢や考え方、態度が、いじめ被害者にとって、自分の視野を広げたり、いじめ被害経験を客観的に捉えなおすことにつながっていると考えられた。

親しい友人の場合では、役立った関わりにおいては、いじめへの介入として、いじめられたときに助けてくれたといった直接的な介入、アドバイスをくれたといった間接的な介入の2つの介入の側面が見られた。友人から直接、間接に関わらずいじめを受けている状況に介入してくれることは、いじめ被害時の人にとって助けになる関わりであったと考えられる。また、友人のそれまでと変わ

らない関わりや相談に乗ってくれたり、自分の味方になってくれるという友人の関わりは、本人にとって心強いものになっていたと思われる。そういった何らかの行動がなくても、友人の存在自体が精神的な支えになる場合があり、友人との良好な関係は、いじめ被害者にとって大きなものと考えられた。

父親の場合では、役立った関わりにおいては、いじめ経験時など本人が不安な状況にある中で頼られて、安心ができ、自分のことを認めてくれる父親の存在は重要なものと考えられた。また、父親のいじめへの対応の特徴として、直接的な介入するという関わりと本人を尊重した対応の2つの側面が見られた。直接的に介入してくれることで、いじめが解決や改善につながっていくことが考えられるし、他方本人の状況や心境を父親として尊重し、それを踏まえた対応が本人にとって役立った関わりと感じられたのだと思われる。

母親の場合では、役立った関わりにおいて、母親は相談に乗ったり、いじめに対して介入したり、本人を励ましたり、親身になったりといったいろんな言葉かけをしたりというように様々なサポートを行っていると考えられる。このような母親の様々なサポートは本人にとって心強いものであると考えられる。また、そういった目に見える関わりだけでなく、いじめを受けるという不安な状況の時に、母親の存在は、精神的な支えになったり、安心できる関係の存在であったりと重要な意味をもっていたと考えられる。

このような周囲の人の関わりをいじめ経験時に持っていたことが、現在いじめ被害経験を自分を成長させてくれたものと肯定的に捉えることができ、プラスの影響のほうを強く感じていることにつながっていると思われる。

役立った関わりの内容の検討

役立った関わりの内容を見てみると、以下のような共通点があることが分かる。

1つに、「相談に乗る」といった内容があった。ペネベーカー（1989）の研究より、外傷体験の他者への開示が心身の健康に良い影響をもたらす結果が出ているが、ある意味トラウマティックな経験ともいえるいじめ被害経験に対して、いじめ経

験時に相談にのってもらえたことは、いじめ被害者にとって肯定的な効果が働いていると思われる。そのことが、いじめ被害経験が自分を成長させてくれた経験と考えられるようにつながっていく1つになったと思われる。

2つに、それぞれの人たちがいじめに対して何からの介入を行っていた。いじめ被害者にとって、いじめに対して介入、関わってくれることはいじめの解決にもつながる可能性もあり、心強いものに違いない。介入の中には、いじめの出来事に対して直接的な介入するものもあれば、一緒に解決方法を考えてくれる、自分の味方になってくれるといった間接的な介入の2つがあると考えられた。直接や間接のいずれにせよ解決につながらなくても、自分を助けてくれる、サポートしてくれる存在は被害者にとって大きなものだと思える。いじめに対して介入があることは、いじめ被害経験をプラスにとらえることにつながると考えられる。

3つに、それぞれの人々の関わりが精神的な支えになっているなど周囲の人がいじめ被害を受けているときに精神的な支えになっていることが、いじめ被害経験を自分の成長につなげる1つの要因になっていると考えられる。具体的にいじめに対してなにかをしてもらったというものがなくても、安心できる関係、精神的な支えを感じられる関係があること自体がいじめ被害経験者にとって大きな意味を持ち、自分の成長としてとらえることにつながっていくことが考えられる。

これらの要因が、いじめ被害経験を自分の成長としてつなげていく上で、役立った関わりと示唆された。

本研究より、いじめ被害経験を相談できることやいじめへの何かしらの介入があることがプラスの影響につながる関わりであると考えられた。しかし、いじめ被害経験者は、いじめ被害経験がない人よりもソーシャルサポートが低いことが示されており（菱田ら、2011）、いじめ被害者が相談できる環境にいることが少ない場合があることが考えられる。

今後の課題として、いじめ被害者が相談しやすい環境をどのようにつくっているかを考えていく必要がある。また、いじめ被害経験に役立つ周囲の関わりについての本研究の知見を活用したい

め被害者への効果的なサポートを測れるようなツールを開発することで、より客観的にいじめ被害者にとって効果的な関わり、サポートを把握することができると考えられ、この点も今後の課題としたい。

謝辞

本研究にご支援、ご協力をいただいた安保英勇先生（東北大学）に感謝申し上げます。

〈注〉

1. 本調査では、「今でも辛く苦しいものと考えている。」と回答した人には、いじめ経験時の「先生」、「親しい友人」、「父親」、「母親」がどのような態度・対応であったかを、また「役立たなかった」関わりについても自由記述で回答してもらっているが、紙面の関係のため本論では取り上げない。マイナスの影響を強く感じている人とプラスの影響を強く感じている人の周囲の関わりの違い、役立った関わりと役立たなかった関わりと比較の検討については、今後の課題としたい。

〈引用文献〉

- Malecki, C. K., Demaray, M. K., & Davidson, L. M. (2008). The Relationship Among Social Support, Victimization, and Student Adjustment in a Predominantly Latino Sample *Journal of School Violence*, 7, 48–71.
- Gini, G., Carli, G., & Pozzoli, T. (2009). Social support, peer victimization, and somatic complaints *Journal of Paediatrics and Child Health*, 45, 358–363.
- 細澤 仁 (2004). いじめを契機とする外傷後ストレス障害の力動的な心理療法 *心理臨床学研究*, 22, 240–249.
- 菱田一哉・川端徹朗・宋昇勲・辻本悟史・今出有紀子・中村晴信・李美錦・堺千紘・菅野瑤・三島枝里子・島井哲志・西岡伸紀・石川哲也 (2011). いじめの影響とレジリエンシー、ソーシャル・サポート、ライフスキルの関連 *学校保健研究*, 53, 107–126.
- Kaltiala-Heino, R., Rimpela, M., Rantanen, P., & Rimpela. (2000). Bullying at schools: An indicator of adolescents at risk for mental disorder. *Journal of adolescence*, 23, 661–674.
- 香取早苗 (1999). 過去のいじめ体験による心的影響と

心の傷の回復方法に関する研究 *カウンセリング研究*, 32, 1–13.

- Matsunaga, M. (2011). Underlying Circuits of Social Support for Bullied Victims *HUMAN COMMUNICATION RESEARCH*, 37, 174–206.
- 松下智子 (2005). ネガティブな経験の意味づけ方と開示抵抗感に関する研究 *心理学研究*, 76, 480–485.
- Holt, M. K., & Espelage, D. L., (2007). Perceived Social Support among Bullies, Victims, and Bully-Victims. *Journal of Youth Adolescence*, 36, 984–994.
- 三島浩路 (2008). 小学校高学年で親しい友人から受けた「いじめ」の長期的な影響—高校生を対象にした調査結果から— *実験社会心理学研究*, 47, 91–104.
- 森本幸子 (2004). 過去のいじめ体験における対処法と心的影響に関する研究 *心理臨床学研究*, 22, 441–446.
- 森下正康 (1999). 「学校ストレス」と「いじめ」の影響に対するソーシャル・サポートの効果 *和歌山大学教育学部紀要*, 49, 302–312.
- Newman, M.L., Holden, G. W., & Delville, Y. (2005) Isolation and the stress of being bullied. *Journal of adolescence*, 45, 343–357.
- Pennebaker, J. W. (1989). Confession, inhibition, and disease. In L. Berkowitz (Ed) *Advances in experimental social psychology*, 22, 211–244.
- Rigby, K. (2000). Effects of peer victimization in schools and perceived social support on adolescent well-being. *Journal of Adolescence*, 23, 57–68.
- 坂西友秀 (1995). いじめが被害者に及ぼす長期的な影響および被害者の自己認知と他の被害者認知の差 *社会心理学研究*, 11, 105–115.
- 嶋 信宏 (1991). 大学生のソーシャルサポートネットワークの測定に関する一研究 *教育心理学研究*, 39, 440–447.
- Sourander, A., Helsela, L., Helenius, H., & Piha, J. (2000). Persistence of bullying from childhood to adolescence: A longitudinal 8-year follow-up study. *Child Abuse & Neglect*, 24, 873–881.
- 立花正一 (1990). 「いじめられ体験」を契機に発症した精神障害について *精神神経学雑誌*, 92, 321–342.